国木田独歩の詩的内容及びその詩風と形式

城後奎子

序

国木田独歩は、三十八年の短い生涯において、常に大きな野心をいだき、理想と大責任とを忘るゝ事なく」過ごす事で、自らの疑問に打ち勝とうとしてきた人である。作家としての独歩を知る人は多い。しかし、詩人としての独歩は、あまり知られていない。その独歩の詩、八十七篇を中心に種々の角度からながめ、独歩の詩風、作風がどういうものであるか、内容の上、形式の上、の両面から明らかにするものである。彼の文学が〝自然の中の人生探究である〟と言われている所以はいったい、どこにあるのであろうか。

本論

一、思想を中心とする詩的内容

○自然観

「吾は自然の児なり」と自らを言った独歩は、風光明媚な地で生れ育ち、その自然環境の好条件と共に、ワーズワース、ツルゲーネフ、エマーソン等に親しみ、独特の自然観を育てゝいったのである。

明治三十年四月、詩集「抒情詩」に『独歩吟』として、収めた詩の中に、「山林に自由存す」の一篇を見出す。社会を都市と田園の二つの世界に分けて、田園を「山林」とよびその「山林」に自由を求め、あこがれの念を持ったのである。信子との恋愛に破れた当時の独歩は、たゞ、ひたすらに自然の児となる事を願い、自然の、山林の前に立っていっさいを忘れ、自然の中に入りこみ、そこに安堵感を始めて得たのである。又、この詩をうたった事で、彼自身の世の中の種々な事件にまきこまれながらも、こうやって耐える事ができるのだという事を言わんとしているのであろう。しかし、こう言ってしまうと、現実からの、社会からの逃避から、自然の中に自由を求めさせたのだ、という事になるかもしれない。実際、「山林」とは、手の加えられていない、自分を囲んでいる自然界すべてゞあり、「虚栄

の途」という、現実の作られた世界に対応させてあるのである。「虚偽の文化」「自由の自然」この二つの言葉により、いかに、独歩が自然の中に自由を求め、そこに幸福を見出したか明らかであろう。「自然の生命は、自由の生命である」とまで述べている独歩なのである。

かと言つて、一生自然の児たらんとして、社会の名誉、名声にはふりむきもしない、といつた人ではなかつた。それだからこそ、政治にも手を出したし、記者生活にも情熱を傾けたのである。自ら「功名心が猛烈な少年で在りまして、少年の時は、賢相名将とも成り名を千歳に残す（中略）……如何にして、我れは、世界第一の大人になるべきやと言ふ問題に触着って後略……」とも言っている。

つまり、「虚栄の途」にあこがれながらもそれについていけず、あまりにも現実の生活が機械的なのを嘆き、自ずと自由を自然の中に求めていこうとしたのであった。あくまでも、独歩の一生の理想は、「自然に帰る」という事だったのである。

独歩は大分県の佐伯での教師生活を一年間送っている。佐伯の自然は、「絵のような自然美」として映り、独歩の抒情的な自然観が育っていったのである。又、独歩文学の核心であるワーズワースの思想が具体化されたのも、この一年間の佐伯生活であった。「佐伯の生活は、吾をして自然に近づかしめたり。」、「凡ての是等のなつかしき自然よ。願くば、吾を今一度、自由の児、自然の児とならしめよ。」と記しているのからも明らかであろう。自然を愛し自然にあこがれるという本質をワーズワースから学び、神秘主義的自然観にも深く共鳴していた独歩である。しかし、同一の思想を有しながらも、全く同一とまでいかず、多少、異なった点を見出す。ワーズワースには、静かな心を持って、執着なく超越的に考える点があり、独歩は、熱情の人いつも血のたぎっている人であったし、その一面、女性的な弱い面を見せているのである。この独歩の弱さについては、片上伸氏の「独歩の一面に極めて醜い、極めて弱いところのあった事を認めざるを得ない。彼はこの弱い心を懐いて、天地人間の間に慟哭したのである。人間として、詩人としての独歩は、そこにみられる。」との言葉に私も同意した。

又、独歩は詩作品に多く、星、月、風、流水、雲のように、最も自然を代表するものに託して、うたつており、又すみれ、少女、星のように清純な、ロマンチックなものを好んでテーマとしている点、注目していいであろう。この事も、雄大な天地、宇宙における一つの静かな実在として詠う、独歩の姿がうかがえる。

このように、独歩は、自然に対して、親しみを持ち、あこがれもしたし、自然の中に溶けこもうと努力したのであるが、他の一面では、自然の雄大さの前には、屈服してし

まうという面もある。このおそれは、自然に対した時の、自分の弱さ、無力を感じる時だったのである。彼の散文である「空知川の岸辺」（明治三十五年刊）を読むと、それがよくあらわれているが、こゝでは、その引用を省略する。つまり、この文から、自然の神秘、不可思議に対して、独歩がいかにおそれていたかを知る事ができると思う。

独歩は、浪漫主義作家として出発したともいわれており自然主義に転向したと考えられるのは、晩年「竹の木戸」や「窮死」「疲労」を発表した頃からであろう。個人の自由に対しての制限が多かったその時代背景の前に屈服せず、正面からぶつかっていった独歩なのである。自然を描写した作品を多く書いている独歩、「武蔵野」（明治三十四年三月）に見える詩情、それにも、自然愛、自然讃美の様子が強くでている。又、他の作品にも、自然を愛す独歩故でなくては描けないという描写で、自然を描いている。それは自分自身、その自然の中に溶けこもうとしているようにも思われる。

永遠な、無限な、雄大な、それでいて一言も語ろうとしない自然、それに向って自分を思い、反省し、そして情熱をたぎらせていた独歩の姿を、種々の作品は、あらわしている。「人を社会の一員としてみるばかりでなく天地間の生命として観んことを求むる。」ことを願って一生を過している。そして、独歩は唐木順三氏が述べられているように、「人間を自然に向って解放する、封建的旧観念を払拭しつくした新しき眼をもって自然をながむる。」事を私達に教えたのである。

自然をあくまでも自然そのまゝに、素朴に描き、自然の意味の説明をすると共に、美しく自然をとらえていった、と考えていいであろう。

○人生観、恋愛観

独歩の自然観と切り離す事のできないのが人生観である「いかに生くべきか」の問題を、自分にとって第一義的なものとして悩んだ独歩、そして、その問に対して、最後まで自ら回答を得なかったのである。つまり、自然の不思議と共に、人生の不思議を常に内在させていた独歩は、毎日を人生との戦いであると考え、少しでも理想に近づかんとして願っていた人だった。〃真実、シンセリティ〃に向って前進していこうとする独歩の姿、これが彼の課題であるとすれば、それは、いったいどこから生れたものだろうか。「吾には大なる秘密あり、それがあるために吾は暗黒の私生児たるか。」の一文が、彼の日記の中にある。つまり、独歩の出生の秘密に対する彼の苦悩なのである。出生の秘密を宿命的に背負って、運命の人となっていったのである。

この事は、独歩の作品（小説）の中に登場する人物をみ

てみると、いっそう明僚となる。登場する人物を評して、
一、社会からも名声からも事業からも抽象された、しかも夫々に奇しき運命を背負って生きている人。
二、流動する社会から置き忘れられたような人。
三、悲哀にみちた人生の敗北者、運命の糸に操られる人。
等と述べられているが、独歩は、好んで、現実から離れた人を描き、その人々に対して、愛情を持って接している。一、に述べた、奇しき運命を背負った人、これは、「河霧」（明治三十一年）「運命論者」（明治三十五年）に登場する主人公にあらわれている。与えられた運命におぼれ、それから、はい上ろうとしない弱い人物である。人間の運命の姿を当事者の受けた心理の内面性で描いたのである。現実生活に対する不満、嫌悪、懐疑と、自分自身に対する無力の念を忘れようと、独歩は自然に向って自由を求めたのであろう。「山林に自由存す」「天外雲あり我を招く」と詠じているように……。

自然の雄大さを思う時、それに対する人間の生、人生は独歩にとって、どう写ったか。彼は、詩人として、小説家としての人生を考えたのではない。あくまでも一個の平等な人間として、自分の生を考え、生活を考えたのである。この人間の生が何の手の下しょうもなく、自然のまゝに浮き沈みするのを知って、独歩は、自然に対して「おどろき」の念を抱くのである。

この、不思議な人生、死、自然をみて驚きたいと願う哲学は、カーライルから学んだのである。『独歩吟』の中には「驚異」という八行詩も収めている。この驚きたいと願う独歩の気持ちは切実であった。

明治三十四年に発表した「牛肉と馬鈴薯」は、独歩の人生観を集約したものであるといわれている。この作品の中で、理想と現実との葛藤が図式化して表現されているが、これは、牛肉が現実生活の象徴であり、馬鈴薯が理想主義の表象である。そして、その矛盾を統一するものとして〝驚きたい〟と願ったのである。新鮮な気持ちで驚く事を願い、驚く事によって、人生を見つめていった独歩なのである。つまり、人生、自然の不思議に対して驚きたいと願つた事こそ、独歩の人生の主題だつたのである。又、独歩の人生観は、直観、主観的なもので、原因の分析や追求はしなかつた。ただ驚きたいと願うのみだったのである。ところで、どうして、この「驚き」の念が独歩に生じたのであろうか。これを今一度考えるために、先に述べた「空知川の岸辺」の作品を思い出してみたい。空知川の岸辺の自然に接したのは、佐伯、岩国武蔵野の自然に接した後の事である。北海道の原始的な荒涼とした自然が立ちはだかり、それまでの静かな、おだやかな自然との違いに驚き、人間の無力を思ってしまう。この不可思議な天地自然に対して〝驚きたい〟という気持ちがおこったのである。

「人生の教師」となる事をも願う独歩、独歩の描く人物の多くは、真面目で誠実、虚栄の途をたどる事なく、世間に逆うことなく、生きている人である。そして、その人生は、自然と切り離す事ができず、自然の中に自由を求めて自然の中に人生を切り開いていったのである。又、宇宙、自然、人生の不思議に驚いている。驚きたいと願っている独歩は人間を人間として描き、常に人生に感動して「ア、」と詠嘆していたのであった。

恋愛観について詳しく述べる事は枚数の関係で出来ないが、当時代の文学作品の多くが主題を男女関係にもっていっていたのに対して、独歩の作品には恋愛というものは、一部に取り扱っているにすぎない。しかし、詩の中では、八十七篇中、二十三篇が、恋や愛情を主題としていると思われる。『独歩吟』の序で彼自身述べた如く、積極的にうたおうとしたのであろう。

又、独歩自身、十三名の女性に大なり、小なりの恋愛感情を持った事が明らかである。

自然の児となろうとして、自然に溶け込む事を願っていた独歩であるが、恋はそれをも妨げたようである。……「森に入る」で告白している。……しかし、これも束の間、恋に破れ、又、自然に入っていくのである。

情熱的というより、おだやかな清純なものが多く、その中、三段論法的に言っている詩もある。――「沖の小島」――いづれにせよ、独歩は恋愛の偉大である事を認めていた。が、自然に接し、宇宙の不思議を考える時は、恋愛から離れ、顧みようとはしなかった人である。恋愛観も、宇宙を前にしては、影が薄かったとみていいであろう。

○宗教観

生涯に於て、独歩はキリスト教の影響を多分に受けている。どう影響され、信仰し、神を考えていたのであろうか。二十一才の年に洗礼を受け、クリスチャンとして生活してきた独歩は、信仰というのを、自分の思索活動の手助けと考えていたと思われる。宇宙の不可思議を思い、人生の不思議を思う時、独歩は、やりきれなくなって、神に祈りを請うたのであった。

神、宗教観をうたっている詩は三篇にすぎない。しかし「シンセリティは信仰性なり、宗教的なり」と言っているように、神に向って祈る事により、真実を得たのである。又、「神の前に於ける平等」は自由、平等を求めていた独歩にとって、必ずなければならない事であった。「独歩の考えているキリスト教は、一種の道徳として、受けとっていた傾きが強い」と柳田国男氏が述べられているように、神の存在の意識は薄かったと考える。「吾が国民の家庭の幸福、平和、温愛、神の光によって作られん事を祈る。」の一文等は、実に道徳的な考えである。又、文学作品に登

場する人物に身分の上下がなく、平凡な社会生活をしている人を書いている点、正にそうである。

信仰する事は、独歩にとって、自然の不思議を知り、その中の自分を見出すという一つの手段であったかもしれない。でも、独歩にキリスト教の影響は多く見受けるし、「信ず」「悟る」という言葉が幾度となく用いられているように、神の児となろうと努力したのは事実であった。独歩は神と人とを考えた時、その中に、もう一歩足を踏み入れる事ができずに苦しみ、宗教の、神の前に立ったまゝ動く事がどうしてもできなかった。

しかし、信仰する事は、社会生活の魔力から救われる事であり、自戒となりざんげとなったのであった。

二、詩の形式と詩風の特徴

まず、ほゞ同時代の詩人として、又、小説家としても名を連ねている島崎藤村の処女詩集「若菜集」と独歩の詩とを比較考察してみたい。

三十年二月に独歩、同八月に藤村とそれぞれ処女詩集を発表している。この二人の詩生活より先、伝統の短歌や俳句では、満足できずに、新しい時代を表現しようと「新体詩抄」が外山正一等の手で出されたのは、明治十五年であった。この西洋詩の刺激を受けて、近代詩が誕生し、その流れを汲んで、二人の詩作が始まったのである。

(イ) 詩の形式による比較

独歩は『独歩吟』の序に詩体につきては余は甚だ自由なる説を有す。(後略) ……。」と言っているように、詩型には特別こだわらずに書いたようであるが、独歩の詩の中四十七篇を調べてみると、

(A) 七五、五七調の定型となっている詩……32篇

(B) 自由な詩型であるもの……15篇

の結果が出た。即ち、詩体につきては自由なる説を有すと言った独歩も、日本古来の伝統的なものに、まだ惹かれていたと言っていいであろう。しかし、自由な詩型の中に入っている「山林に自由存す」「独座」「今こそは」等の詩は、明らかに西洋調の、思ったまゝ歌いあげた散文詩的なものである。独歩にしてみれば、独自の特徴ある詩形式を築かなくても、自分の思いをそのまゝ歌えば良かったのであろう。

又、一方、藤村をみてみると、主として、七五調の快いリズムで統一してうたっている。脱出しようとした伝統詩の和歌や俳句のリズムをそのまゝ受け入れていて、一見すると藤村の詩は、古風なもののみで盛られているようでさえある。しかし、これは詩精神をみると分るが、底に流れている精神は、新しい時代の息吹が感じられるように、積極的な、新鮮なものであったとみてよい。

このように、独歩の詩には、その時々によって、思いの

まゝ自由な精神と形式でうたいあげた感があるが、藤村の詩は七五調で、美しく、優雅にうたっているとしてよい。

次に、詩の長短で、さらに両者の特徴を明らかにしたい。

◎行数からみると、

若菜集	国木田独歩	対照／行数
8	30	10行以下
21	12	20〃
3	3	30〃
4	0	40〃
3	1	50〃
5	0	60〃
3	0	70〃
1	0	80〃
0	0	90〃
1	0	100〃
2	1	100以上
51	47	計

◎連数からみると、

若菜集	国木田独歩	対照／連数
10	28	1連
9	6	2〃
6	1	3〃
7	3	4〃
3	0	5〃
2	1	6〃
2	0	7〃
1	0	9〃
2	0	10〃
1	0	11〃
1	0	12〃
1	0	13〃
1	0	17〃
1	0	25〃
0	1	28〃
1	0	30〃
3	7	その他
51	47	計

◎一連毎の行数をみると、

若菜集	国木田独歩	対照／行数
0	1	3
25	9	4
3	1	5
7	0	6
3	1	8
11	35	その他
51	47	計

註　統計はすべて、独歩「独歩吟」22篇、「青葉集」10篇、「山高水長」15篇の計47篇と、「若菜集」51篇をその対照とした。

表をみるとわかるように、独歩の詩は、全体的にみて短い。10行以下の詩が30篇でありその中でも、4行詩が10篇である。又、47篇中、28篇が一連のみで構成されている。という事は、独歩の場合、その時々の感動を、詠嘆を詩にあらわすのに、技巧的に、独自の調子に固執するという事なく、ほとばしる情熱でしているのである。作るというより自然に生れてきた詩ともいえる。尚、短い点はかり指摘したが、「山高水長」に収めてある「たき火」や対照の作品外の詩で「かぐや姫」等、いずれも百行以上である事をこゝに記しておく。

次に藤村であるが、独歩と比べると比較的長い詩が多い。そして、前に述べたように、七五調で、理路整然と歌われており、独歩の自由さからみて、やはり、古風という感がする。又、技巧的構成がみられる点、形式を重んじたのが藤村の詩という事が出来よう。

このように、詩型の自由なる説の独歩と、藤村の詩、そのどちらにも、思想、感情上、新しい時代に、新しい詩歌が生れたという性格を有していると考える。

(ロ)　詩風の比較

独歩の詩には、自然と人生をうたったものが多い事は先に述べた。自然と人間との結合、自然に人生を求める姿を託したのである。自然を前にして哀感を感じる独歩は、自

然に対する真率な詠嘆を詩風としている。が、藤村は、自然にロマンチックな気持ちで接し、自然の美を詠嘆と止まらずに、そこに美的立場をもってきたのである。そして、人間の生命を持つ如く、うたったといえる。ここに、独歩はワーズワース的であり、藤村はバイロン的であるといわれている所以があろう。

形式と無関係に理屈っぽく、暗い感じのする独歩の詩は、主題も複雑であり、口ずさむには遠い感があるのと比べて、藤村は、自然の情調化、精神化をあらわすと共に、暖かく優雅に、調べにのせてうたい、自我のめざめ等を含めて流麗に歌っている点、両者の詩風は大いに異っている事が明らかである。しかし、両者とも、西欧的な近代的詩情がその根底に流れている事は、否めないものであり、新しい時代の息吹が充分感じられるものであった。